

高い診断率が得られ、特に肺結核症において過去の28%から87%へと確定診断率が向上した。治療面では外科手術例の増加が認められ、現在まで肺癌6例、良性腫瘍3例（肺過誤腫、縦隔奇形腫、硬化性血管腫）の計9例に手術が施行された。

#### 15. 当院における呼吸器科診療の現況

##### —肺癌を中心に—

山口哲生 (小田原市立・内科)  
穂坂隆義, ト部憲和, 福田 淳, 安野憲一,  
尹 良紀, 鈴木裕之 (同・外科)

神奈川県では、昭和57年4月から医師会の主催で肺癌研究会が組織され、肺癌の早期発見に努力している。当院で加療された肺癌患者数は、56年までは、年間10例未満であったが、57年には20例、59年には40例と増加の一端をたどっている。治療切除例も59年には7例にのぼった。さらに肺癌研究会を充実させることで、紹介患者数、治療切除例数は増加していくものと期待される。

#### 16. 当院における肺癌治療の現況

鈴木亮二, 相楽恒俊 (県立鶴舞・外科)

約10年間にわたる原発性肺癌42例の診断、および手術切除例15例等の治療の検討より、今後(1) high risk グループの screening を含め細胞診を中心とする組織診断の成績向上と(2) 外科療法を一つの補助療法と考え、癌性胸膜炎や他臓器転移肺癌に対する外科療法の適応拡大に努めるべきと考える。

#### 17. IV 期肺癌に対する化学療法と予後の検討

滝口裕一, 橋爪一光, 笠松紀雄, 篠崎克巳  
(県西部浜松医療センター・呼吸器科)  
半沢 備, 和田源司, 佐藤展将  
(同・胸部外科)

当センター8年間のIV期原発性肺癌151例の予後を検討した。非小細胞癌と小細胞癌の予後に有意差はなかった。化療により非小細胞癌の予後は改善したが小細胞癌では改善せず、進行小細胞癌では抗腫瘍効果が予後向上に関わっていない可能性が示唆された。年齢別では、50歳から69歳に化療による予後改善を認めたが、高齢者では進行肺癌治療の難しさが再確認された。最近化療は急速に進歩しており、さらに検討を続けたい。

#### 18. 慢性関節リュウマチに続発した全身性アミロイドーシスの1例

頼 勝啓, 増山 茂, 吉田明夫  
(公立長生・内科)

今回、我々は長期の下痢と全身の著明な浮腫、低蛋白血症を有し、当初、吸収不全症候群、続いて慢性関節リュウマチ及び SLE, MCTD を疑い、腎生検、直腸生検にて全身性アミロイドーシスと診断し得た1例を経験した。本症例はその臨床像より慢性関節リュウマチに続発した全身性アミロイドーシスと考えられる。

#### 19. 金製剤使用中に間質性肺炎を合併した慢性関節リュウマチの1例

白沢卓二, 宮沢幸世, 片岡満男, 田沢 浩,  
村木 登, 平井昭 (千葉市立海浜・内科)  
山下武広, 鈴木洋一 (千葉市立・整形外科)  
鈴木公典 (国立千葉東・内科)

今回我々は、44歳女性で、慢性関節リュウマチで経過中、金製剤使用開始後3か月目に間質性肺炎を合併した症例を経験した。ステロイド使用後、症状、レントゲン、呼吸機能共に著明な改善をみた。ステロイド中止後RA 症状の再燃をみたが、間質性肺炎の増悪はなく、臨床経過より gold lung と考えられたので、リュウマチ肺との鑑別を加えて報告した。

#### 20. “混合型肺炎”と考えられる症例の臨床的検討

斉藤陽久, 中村和之, 諸橋芳夫  
(旭中央・内科)

病理形態学的観点から、齊木等は「肺胞性肺炎と間質性肺炎の像が種々の程度に混在し、肺内である程度の拡がりを有するもの」を“混合型肺炎”と命名した。しかし、その臨床的意義は未だ明らかではない。そこで、当院における臨床的“混合型肺炎”8例を整理検討した。結論：①老人又は重篤な基礎疾患を有する例の、②弱毒菌による肺感染症で、③胸部X線上両肺びまん性に肺胞影と間質影の混在を認め、④抗生剤のみでは予後は著しく不良で、⑤ステロイドの奏効する例のあることが、特徴と考えた。